
遊戯王Gレボリューション

ariginnda

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王Gレボリユーション

【Nコード】

N3427Z

【作者名】

ariginnnda

【あらすじ】

チーム5D'sがイリアステルの手からネオ童実野シティを救い、遊星たちが「正しき未来」に向けて歩みだした後の30年後の話。

ネオ童実野シティは夢と共に歩む街、ドリーム童実野シティと変わり、デュエルの形も一気に変わっていた。「ハートランドシティ」のARビジョンを基に作られ、フォーチュンのメインフレームを利用した、DFビジョンによってデュエルをしていた。

その名をDFデュエル。

このデュエルが今の流行となって、盛んになり、みんなが楽しんでいた。

この、風宮遊矢もそのうちの一人。相棒であり、自身のエースモンスター、「青龍皇ドラグーン」と共に、数々のデュエルをしてきた。そして、いつか見る決闘王の夢を見ていた。しかし、遊矢はまだ知らなかった。自分がドラグーンと出遭った日から、この先の運命は決められていたということ。遊矢は数々のデュエルの中で『聖獣』の存在を知る。

SEINTO

この全宇宙が一枚のカードによって生まれた。

表が「光」、裏が「闇」。表の「光」、即ち「光の意思は」自らの思うがままに破壊を続け、「光の波動」と呼ばれるようになった。裏の「闇」、即ち「闇の意思は」闇となっている宇宙を守り続け、「正しき闇」と呼ばれるようになった。

この相反する力同士が衝突し合い、いつ終わらぬか分からない戦いを続けていた。そして、「正しき闇」は、この光を超える光の力を解放し、この「光の波動」を封印した。そして、この「闇」が解放した、この光を超える光の力を、人々は恐れと尊敬を交えてこう呼んだ。

『聖獣』、と。

そして、何億年の時を超え、今再び、この「光の波動」の本性が復活しようとしていた。

たくさんさんのモンスターたちのうなり声が聞こえる。物陰を覗き込んでみると、何億を超えるモンスターが真っ白な光の前に立ちふさがるように、対峙していた。

ググ・ガガアアアアアツ!!!

一匹の大きなドラゴンが地響きが発生するほどの咆哮をあげると同時に、周りにいるモンスターたちがまた咆哮を上げ、全てのモンスターたちが真正面向かってその光に向かってそれぞれのさまざまな色の尾を引きながら突進していった。

一体一体がその光にぶつかるたびに大きな爆音が響き、光が闇に食われていく。そして、最後の一匹だった青い胴体が長い龍が大きな咆哮をあげながらぶつかると、光の発光が不安定になり、点滅しているような光を出した。

そして、闇が弱っているその光を隙見たかのようにみるみるうちに喰らい尽くしていく。

弱りきった光は闇に抵抗し続けていった。何の雄叫びか分からないような叫び声が光の中から聞こえる。しかし、闇はそれを喰らい尽くしていく。そして、叫び声が聞こえなくなったと思ったら光が闇に暗い尽くされ、闇と共に消滅した。

主な登場人物

風宮遊矢^{かざみやゆうや} 主人公。16歳。肩に掛かるぐらいの髪型を適当に縛っていることと、ほんの少し赤めの瞳、いつもかぶっている帽子が特徴的な少年。デュエルに対して熱い心を持っており、不必要なカードは無いと信じている。窮地に陥れば陥るほど、好きなカードを好きな時に引き当てる程の運を持ち、デュエルに対して天性の才能を持っている。非常に人思いであり、人の感情の変化に非常に敏感。その性格の為、自分のことをいくら汚されても、平気でいるが、自分の周りの人間や、カードたちを汚されるのは決して許さない。「青龍皇ドラグーン」をエースモンスターとしており、相棒ともしている。「ウインディア」と名のついた風属性モンスター中心の高速ドローデッキを使い、「エポリューションモンスター」をフィールドに揃え続けるような戦術を得意としている。

光風梓^{こうふうあずな} ヒロイン。15歳。腰まで伸びる茶髪の両側頭部がわの髪型を三つ編みにして、その二つを結び付けたような髪型と、髪の毛と同色の瞳、透き通るような肌色、可憐な容姿が特徴。遊矢とは幼馴染だが、小学生ぐらいの時に両親の都合でドリーム童実野シティを離れたが、再びこの街に戻ってきた。明るくて、キョウジュ曰く「この子の笑顔は周りを幸せにする」らしい。ドリーム童実野シティで四皇と呼ばれていた、光風達斗の影響でデュエルを始めた。遊矢曰く「気づいたら何も出来なくなってた」と言うぐらいの光属性中心のロックデッキを使う。エースモンスターは「救輝竜 レジエンド・セイヴァードラゴン」。

上瀬トウヤ^{かみせ} 遊矢のライバルの一人。17歳。白色のライオンの鬚^{たてがみ}

のような前髪と、藍色っぽい黒いろの後ろ髪、いつも首にかけているスカーフと黒色の寅一のようなズボン、右顎下から頬まで伸びる赤いペイントが特徴。科目でクールな性格で、時としては一日中口を開かないことだっている。しかし、根は優しく熱い物をしっかりと秘めている。デュエルの全国王者であり、世界トップレベルのデュエリストである為、「今最もキングの座に近い男」と言われている。チーム・サイキックとは何かしらの因縁を持っている。「ヴォルケイオス」と名のついた炎属性モンスター中心のビートバーンを使い、遊矢と同じく、「エボリューションモンスター」を出し続ける戦術を得意としている。エースモンスターは「朱雀皇ドランザー」。

キョウジユ（さいきつあめ）（齋木亮）は遊矢の親友。16歳。遊矢の身長約3分の2ぐらいの身長と、赤みが掛かった髪色、その髪の毛の隠れた目と、頭につけているだけなのか分からない丸眼鏡が特徴。目上ならまだしも、同い年の人や年下の人にも丁寧語を使う。（ただし、自分の年以下の人を呼ぶ際は呼び捨てになる）

デュエリストと言うより、コレクターの傾向が強く、自分の持っているカードは全て宝物だといっている。いつも小型のカメラ付きのノートパソコンを持ち歩いており、デュエルを撮影して、デュエリストのデータを作っている。「ガエル」と名のついたデッキを使い、癖のある戦術を得意とする。エースモンスターは「ガエル・ゴツデス」

海原サティは遊矢のライバルの一人。16歳。頬にあるそばかすと、黄色いライオンの鬣の様な髪型が特徴。非常に社交的で、笑顔を絶やさない。つらい時にこそ笑顔は絶対忘れてはいけないと言うことを誰よりも一番良く知っている。アメリカ人の母と日本人の父親の

間に生まれ、明るくて器が大きいのは父親譲りで、そんな中でもしっかりと物事を観察しているのは母親譲りである。遊矢とは会って早々に仲が良くなった。最後にカタカナ表記のようなしゃべり方をする。「スプリント」と名のついた水属性モンスター中心の高ディフェンスカウンターをするという少々トリッキーな戦術を得意とする。エースモンスターは「玄武皇ドラシエル」

李^{オウライ} 桜雷^{オウライ} 遊矢のライバルの一人。18歳。足元まで延びる黒い髪を髪先までまとめており、黄色い鋭い目つきが特徴。愛称は「ライ」。トウヤよりかは口数は多いが、クールで物事を余り感情的に捉えない性格。しかし、人情は分かるようで、村に残してきた村民をいっつも気にかけている。遊矢とデュエルした際、遊矢がカードの精霊と会話をすることが出来るということにいち早く気づいた。(それまで周りはたまにぶつぶつ独り言を呟いていると思っていた)カードの精霊の存在を視認しており、彼も生まれつき精霊と言葉を交わすことが出来る。「エリクシル」と名のついた雷族、獣族モンスターを中心とした攻守バランス型のデッキを使い、「雷の一撃必殺コンボ」を得意としている。エースモンスターは「白虎皇ドライガー」

光風達斗 梓の兄であり、遊矢のライバルの一人であり親友でもある。19歳。漆黒の髪色に、漆黒の瞳、ほんの少しの白目の肌、整った顔立ちが特徴。ドリーム童実野シティでは「四皇」の一人であり、圧倒的なデュエルタクティクスを持つ。プロリーグからの勧誘を何度も受ける程の実力であるが、本人は全ての勧誘を蹴っている。飄々とした性格で、ほんの少し脱力感を感じさせる。大体は寝てるかふらふらとどこかへ散歩へ行っている。言うなれば遊矢の性格の一部が真逆な性格。「暗黒界」と名のついた悪魔族モンスター中心のデッキを使う。エースモンスターは「暗黒界の聖龍 オルガイル」

キーワード

ディメンショナルフィールド
DFデュエル^{II}「ハートランドシティ」で盛んになっている「ARデュエル」に使われている「ARビジョン」をベースに作られた「DFビジョン」と呼ばれる投影技術を使うデュエルのこと。ARデュエルとは違い、「Dゲイザー」を必要とせず、ドリーム童実野シティの住民なら誰でも持っている「Dバンド」に搭載されている、「Dジエネレーター」をONにすることで、自分の周りに「ディメンショナルフィールド」と呼ばれる空間が形成される。その空間内であれば、「DFビジョン」を視認することができ、そのフィールド内では、「デュエルディスク」が実体化する。

エポリユーション召喚^{II}自分フィールド上に存在する「ベースモンスター」と他の自分フィールド上に存在する同レベルのベースモンスター以外のモンスター1体以上をとともに墓地に送ること（これをジエネレートという）、エクストラデッキから「エポリユーションモンスター」と呼ばれる種類のモンスターを特殊召喚する。このモンスターの効果を発動する際は、墓地に存在する素材にしたモンスター（エフェクトコア）をデッキに戻すことで効果を発動できる。エポリユーションモンスターが一度フィールドを離れ、また一度特殊召喚されると、先に送った「エフェクトコア」をデッキに戻すことで、効果を発動できる。

ドリーム童実野シティ^{II}今作の主な舞台。チーム5D'sがイリアステルの手からネオ童実野シティを救った30年後の童実野シティ。「夢と歩む街」をスローガンに、立てられた。フォーチュンのメイソフレームもあり、今では世界の先導になって、世界中を「正しき

未来」に導いてきている。

精霊⇨デュエルモンスターズ界の住人のことを言う。特定の選ばれたものには視認することができない。

聖獣⇨正しき闇が光の波動に対抗するために創り出した、光を超える光の力。精霊の類になり、聖獣を扱う者は聖獣と会話することが出来る。(扱えなかったり、精霊を視認出来ない者は出来ない)

四聖獣⇨しせいじゅう聖獣のうちの4体の上位個体に位置する聖獣。

SEINT 1

少年の目が開いた。朝の日差しがカーテン越しに少年の顔に当たる。ちよつと赤めの瞳が日光を捉えると、あまりの眩しさで目を閉じてまた別の場所を見た。

別の場所、即ち、目覚まし時計。現時間、8時10分。

「あ・・・ああ!!」

この少年の布団上に舞い上がった。8時10分といったらもう良い高校生はご登校の時間だ。とつとと用意して、とつとと家を出なければ先生にどやされるのは目に見えている。

台所にすぐさま直行し、いつの間にもやら用意されていた食パンを丸呑み、公立の癖に私服の高校だからいつも着ている黄色いパーカーの上に赤い半そでのシャツを着込み、下の黄色いパーカーの腕を捲くるだけだった。そして、自分の方まで伸びる髪の毛を適当に縛ってトレードマークである帽子を逆つばにして被るだけだった。

(カバンOK。身支度OK。バンドOK。デッキOK。よし)

少年は部屋からドタドタと板張りの廊下を走り出して玄関に出た。「じいちゃん！行って来る！」

そういつて少年が引き戸を開けると後ろの方からバタバタとやけにテンポの速い足音が聞こえた。

「待てい！遊矢あ！」

遊矢の頭上から竹刀が振り落とされてきた。バキンツィという盛大な音と共に屋根に止まっていた雀が青空の彼方に飛んでいった。後ろでは二の腕辺りまで伸びた白い髪の毛を後ろで縛っている遊矢の祖父らしき男が、やったたぞ顔で鼻で笑った。

「ふふん、遊矢よ。いつまでもカード遊びなんぞ辞めて、いい加減に本家である剣術を学んではいいじゃろう」

「そうか？俺はそんなこと思ってないけど。じゃあ、行って来る、じいちゃん」

「へ？」

これは予想外！竹刀で見事に遊矢の脳天を叩き割ったと持ったらその御当人は何食わぬ顔で帽子を拾い上げ、軽快な足音を立てながら門を走り出ていった。

だったら、あの音はいつたい何なんだ？そう思いながら爺さんが目を開けた先には……。

「ッ！！」

まるで漫画みたいな光景だった。大事に大事に育ててきて息子同然に扱ってきた盆栽をあるう事が自らの手でその生を止めてしまっていたのだった。爺さんは開いた口が閉じない状態に陥ってしまった。

「お、おのれえ！遊矢あ！」

本人に聞こえる筈の無い叫び声を虚しく朝空に響かせた。

ここはドリーム童実野シティ。旧名ネオ童実野シティ。人口は約3千万人。「夢と歩む街」という言葉をスローガンに、未来へと歩み続けている。

この少年、風宮遊矢かみみやゆうやはその街に住む一人。今彼が持つ唯一の夢は「デュエルキング」になる事。

しかし……。

「まずいって！遅刻するう！」

そのデュエルキングを夢見る少年がこうもある遅刻魔だと相当恥ずかしい者だ。面目が立たない。

「おつとつと……」

遊矢はステップを踏みながらバックし、通り過ぎたベーカリーの前に止まった。さつきは食パンを丸呑みした物だから、あまり朝飯食った気になれない。ということなので……。

(ちよつと買っていくか)

とか言う呑気なことを考えだした。

その約1分後、遊矢は走りながらも買い取ったコッペパンを食べきり、そのまま自分の通う学校へと真直線に走っていった。

「ぐおおおおおッ！」

遊矢は学校の階段を全力疾走中。陸上部もびっくりのスピードで一気に駆け上がった。自分の背負っているカバンがガンガンと背中をあたるが、そこは無視だ。

「遅刻までギリギリ寸前！風宮選手、間に合うかあ！」

遊矢は自分に「気」を入れるつもりで自分の教室まで一気に駆け走っていた。こんなにもスピードがあるなら、陸上部からの勧誘もあってもおかしくない。

そして、自分のクラスのドアをガタガンッ！というあり得ないぐらいの大音量を響かせて開け放った。絶対バグッた。教室にすでにいるみんなはビクンッ！と体を震わせて、遊矢が開け放った後ろのドアを見つめて、その後遊矢の方に視線が集中した。

しかし、そんな目線なんぞ、無視だ、無視。時間時間！遊矢はバツと掛けられている時計に目を移した。現在、8時24分。

「よっしやあ、ギリギリセーフ！連敗記録ストップ。頑張ったよ、俺」

遊矢は大きく野球でのセーフサインを出した後、胸をなでおろした。後は悠々と自分の席に座るのみ。心のそこから自分に対してお疲れさん、といたいところだ。

「お疲れさん」

そうそうこういう風に・・・ん？遊矢は異変に気づきその声のほうへ振り向いた。その振り向いた先には、白い髪の毛をした現代文の教科担任であり、この遊矢のクラスの担任でもある、松野空敏まつのそらとしが、遊矢を見つめていた。（恐らく本人は睨んでいるつもり）

もう気まづくなってきた。さっきの喜びや歓喜はいったい何処に・・・さっきこんな空気の中で大声あげて喜んでいたのか。

「残念だったね。あの時計、今止まってるから」

「何!？」

予想外!じゃあ、リアルな時間は?遊矢は自分の付けた「Dバンド」に搭載されている時計に目を移した。リアルな現在時刻、8時55分。30分オーバー。遊矢の気分が天国から一気に地獄へと垂直落下した。訳の分からないどんよりオーラが遊矢の体から発せられた。

「早く席に着きなさい」

松野から冷たく言われ、遊矢は溜め息を吐きながら席に移った。席に座るや否や、隣では遊矢の身長の3分の2ぐらいの身長の少年が笑いをこらえて、「ぶくく」とわずかに笑い声を出していた。遊矢は暗い表情で隣を睨んだ。この少年は齋木亮（さいきりょう）。皆からは「キョウジユ」と呼ばれ親しまれている。そのあだ名ゆえ、学業成績はいつでもトップ。どこぞの誰かさんとは全く逆だ。

「んだよ、キョウジユ」

「いゝや?さすがは遊矢、天才的なデュエリストなのに、ここにこれば最悪な運の尽き」

「んだとお?」

遊矢はキョウジユをじと目で睨んだ。当のされている本人は口元で笑いを浮かべていた。

「だつてえ?」

「だつてえ?だつてなんだ?」

「.....」

さすがにこれ以上言つと、遊矢が怒る。ストップだ、ストップ。キョウジユはそう言い聞かせて、黒板のほうへ向き直った。楽しみなのは、昼休みだ。

「うつげえ.....デュエル場全部使われてるよ。あゝあ」

遊矢は昼休みの学校のデュエル広場を見下げて口をひくつかせた。

さつきまで遅刻の指導を受けてたのが仇になつたか……。遊矢はがつくりと肩を落とした。その様子をキョウジユは呆れ顔で見上げた。

「仕方ありませんよ。6日連続で遅刻する、遊矢が悪いんですよ」

「仕方ねえだろ？朝苦手なんだから」

「全員きつとそうですよ」

キョウジユは笑いを浮かべながら真正面を向き、人差し指をピンツと立てた。遊矢はその様子を口を尖らせて見下げ、鼻で小さく溜め息を吐いて周りをゆっくりと見回した。

「どつか開いてくれないかなあ？」

遊矢はそう呟きながら、苦虫を潰したような表情を浮かべた。

「ん？」

そして、遊矢の目が止まった。やけに人が集まっている場所がある。遊矢はキョウジユの肩を指で叩き、キョウジユは「ん？」といながら遊矢の方へ見上げた。

「あれ」

遊矢が指差した、人が集まっていたデュエル場の方へ目を向けた。というより何も見えない。見えるようにするには？

「キョウジユ、ちよつと覗いてみようぜ」

「そうですね」

遊矢とキョウジユは自分の腕についている「Dバンド」についているダイヤルを回した。

すると、遊矢とキョウジユの耳に、Dバンドからの「デイメンシヨナルフィールド、アウェイク完了」という音声が聞こえたと思つたら、辺りがほんの緑掛かり、しかも、召喚されたモンスターが視認出来る。これこそが、「DFビジョン」だ。「Dジェネレーター」をONにすることで、このDFビジョンが視認出来る。

「おーっし。行つくぜえ、キョウジユ！」

そう行つて遊矢は全力疾走で階段を駆け下りて言った。とんでもなく早いスタートダッシュの上、トンでもないスピードの全力疾走。

遊矢は言ったとおり、ど厚かましく、押しのけ押しのけと人ごみの中へと入って行き、ようやく先頭列を獲得した。後ろからもキョウジユが遊矢が明けた道を着いてきた。

遊矢がデュエルを見たころにはすでに、決着が付いていた。

「んだよ・・・もう終わってるのかよ」

キョウジユが遊矢の横に來ると、手を膝について身をかがめ、はあはあと息を吐いた。

「遊矢、ちよつとぐらいスピード落としてくださいよ」

キョウジユが遊矢の顔を見上げて眉毛を吊り下げていった。たぶん・・・。前髪に目が隠れてあんまり、と言うより全く見えない。しかし、たぶん遊矢には分かるのだろう。

勝ったのは学校の生徒じゃない。そもそも、このデュエル場だけは公益で、学校の生徒じゃないデュエリストもよくデュエルしに来ている。しに來ているのだが、なんだか勝った方のデュエリスト、うれしくなさそうだった。

白いライオンの鬣のような前髪に、藍色掛かった後ろ髪、黒色の寅一に、青みが掛かった黒色の服、首に掛けた白いスカーフが特徴的な少年だった。たぶん、遊矢より1つぐらい年上だ。

「ん？あれつて・・・」

遊矢は顔をしかめてその少年の顔をじっくりと見た。どこかで見ただことがあるような・・・。

「ああっ！」

横でキョウジユが叫んだ。いきなりの大声に、遊矢の心臓がバクンツと自分でも分かるくらい大きく鼓動した。

「遊矢！上瀬トウヤですよ！全国チャンピオンの！世界トップレベルのデュエリスト、上瀬トウヤですよ！キングに最も近い！」

「おお！そうだった」

遊矢は何か思い出したように手のひらをポンツと叩いた。全国チャンピオンで、「今最もキングの座に近い男」。それが上瀬トウヤだった。何でそんな常識なことを思い出せなかったのだろう。

「よっしやあ！今度は俺とデュエルだあ！」

やる気ゲーシ満タン！遊矢のデュエルバカスイッチがONに為るや否や飛び出していった。とは言えども、トウヤはつまらなさそうな表情を浮かべながら背を向けて立ち去ろうとしていた。

「待てよ！」

「……………」

トウヤは遊矢の声に反応して足を止めて、冷たい目で遊矢の方へ振り向いた。しかし、遊矢には見えた。トウヤの冷たい目の奥の赤い何かが。瞳の色もそうだが、もっと内情的なものが。

「くそ、あんなに冷たいのに……。やっぱりあんぐらい冷たくて冷静じゃないとデュエルって出来ないのかねえ」

遊矢の後ろからそんな声が聞こえた。遊矢は歯を噛み締めた。

（違う、トウヤは冷たくなんかない。目を見ただけで分かったんだ。んな訳あるかよ）

遊矢はグツと拳をトウヤの方へ向けた。

「デュエルだ！トウヤ。俺とデュエルしろ！俺が、本当のお前を引き出してやる！」

「何？」

トウヤが初めて遊矢に対して口を開いた。

「そうだ！俺は風宮遊矢！俺がデュエルキングになるんだ！お前を超えて！」

トウヤは目を細めて遊矢を見つめた。そして、トウヤは遊矢の方へ体を向けた。あくまで、無表情で。

「行くぜえ、トウヤ！」

遊矢は大きくDバンドがあるほうの左腕を上に掲げた。すると、デュエルディスクが実体化した。ディメンショナルフィールドの中ではデュエルディスクが実体化する。これこそがDFデュエルの特徴だ。デュエルディスクはディメンショナルフィールド内で実体化させ、それを使用する。

「デュエルディスク、セット！」

「フン！」

トウヤは左腕のDバンドを一振りさせて、デュエルディスクを実体化させた。

DFデュエル、スタンバイ完了

こうして、会うべきしてあった、二人のデュエルが始まった。

/ /

/ / / / / / / / / / / /

「デュエル！」

【遊矢】 LP4000

【トウヤ】 LP4000

【遊矢】

「行くぜ！俺のターン、ドロー！」

遊矢は力強くデッキの上から力強くドローした。

「俺は手札から、『カゼボー』を特殊召喚！」

遊矢は手札からモンスターカードをセットした。すると、DFビジョンに遊矢がセットしたモンスターと同じイラストのモンスターが実体化した。

カゼー！

ATK300 DEF100 LV:1

「カゼボーは、手札に存在する時、特殊召喚扱いとしてフィールド上に召喚することが出来る！」

「……………」

トウヤは遊矢を静かに見つめた。対して遊矢のテンションは上がりつつ切りだった。止まる気配が無い。

「そして、俺のフィールド上に風属性モンスターが特殊召喚され

た時、手札から、『ウインディア・ツインズ』を特殊召喚！」

遊矢のフィールドに風の翼を持った子供の双子の天使のモンスターが現れた。

ATK500 DEF0 LV.2

「そして、フィールド上のカゼボート、ウインディア・ツインズをリリースし、手札から、『ウインディア・シムルグ』をアドバンス召喚！」

遊矢がデュエルディスクにセットされた『カゼボート』と『ウインディア・ツインズ』を墓地に送ると、DFビジョンに映し出されたカゼボート、ウインディア・ツインズの下に紫色の魔方陣が描かれたサークルが出現したと思ったらそのサークルの中に二体のモンスターが吸い込まれてその後、サークルの中から、緑色の体色をして王冠を被った大きな鳥が羽ばたき現れた。

キオオオツ！

ATK2400 DEF1000 LV.7

「ウインディア・シムルグの効果発動！このモンスターが『ウインディア』と名のついたモンスターのみをリリースしてアドバンス召喚された場合、俺のデッキから二枚ドロウする！」

「俺はカードを二枚セットして、ターンエンド！」

【トウヤ】

「俺のターン、ドロウ！」

トウヤはカードをドロウするなり、既に何をするのかを決めていたかのように軽い手使いでカードを一枚取り出した。

「相手フィールド上のみモンスターが存在する時、俺は手札から『ヴォルケイノス・ナイト』を特殊召喚することが出来る！」

トウヤがカードをセットすると、DFヴィジョンによって炎柱が投影され、その中から白銀色の鎧を着た、しかしほんのりと熱を帯びているのか赤みが掛かった、手に剣を持っている騎士が、トウヤ

のフィールド上に特殊召喚された。

ATK1700 DEF1000 LV.3

「さらに、俺のフィールド上に『ヴォルケイノス』と名のついたモンスターの特殊召喚に成功した時、手札から『ヴォルケイノス・サーペント』を特殊召喚することが出来る」

その言葉を言った後、トウヤのフィールド上に、光の粒子と共に、炎をまとった蛇が現れた。

ウウ・・・シャアアア!

ATK1000 DEF0 LV.3 ベース

「ベースモンスター・・・まさかッ!？」

遊矢の頭の中にはヤバイ構想が成り立ってしまった。これは・・・!?そして、遊矢の構想が完全に成り立ってしまった。

「俺はレベル3のベースモンスター『ヴォルケイノス・サーペント』に、レベル3の『ヴォルケイノス・ナイト』をジェネレート!

その言葉と共に、『ヴォルケイノス・ナイト』緑の輪郭を残し、体全体が透明化したと思ったら3つの粒子となり、その粒子が『ヴォルケイノス・サーペント』の体につき、そのモンスターが緑色の光の輪となってモンスターを形成していった。

「紅蓮を纏いし炎の奏者よ、今こそ全ての空気を導き、燃え咲かせろ!エボリユーシヨン召喚!」

そのトウヤの言葉と共に、光の輪の中に炎柱が上がり、大きく広がった。

そして、その炎柱から指揮棒を持った、紅蓮色の服を着た指揮者が現れた。

「指揮せよ、『炎奏者 ヴォルケイノス・タクト』!」

『ヴォルケイノス・タクト』は指揮棒を一振りして、火を巻き上げらせ、口元で笑みを浮かべた。

フンッ

ATK1700 DEF2400 LV・5

「エボリユーションモンスター……もう出てきやがった」

「『ヴォルケイノス・タクト』の効果発動。エフェクトコアを一つ使うことで、相手フィールド上に存在するモンスター一体を選択、そのモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで半分にしその数値だけ、相手のライフポイントにダメージを与える」

「何!？」

遊矢のフィールドには『ウィンディア・シムルグ』のみ。このモンスターの攻撃力の半分の数値は1200だ。

『ヴォルケイノス・タクト』が指揮棒を一振りすると、その指揮棒の先から日の渦が巻き上がり、それが一直線に『ウィンディア・シムルグ』にぶち当たった。

キキヤアアアツ!!

渦の中で『ウィンディア・シムルグ』が苦しくもがいて叫んだ。

ATK2400 1200

そして、その余波が遊矢にぶち当たる。

「ぐッ!」

【遊矢】 LP4000 2800

「さらに、『ヴォルケイノス・タクト』が効果を発動した時、使用したエフェクトコアが『ヴォルケイノス』と名のついたモンスターの場合、手札のカードを一枚捨てることで、デッキからカードを一枚ドローする」

カードの流れが全く止まらない。トウヤのターンがいつまでも続いていった。

トウヤは手札のカードを墓地に捨て、デッキから一枚のカードをドローした。そして、さつき捨てたカードを取り出し、手に取った。

「そして、手札に存在する『ヴォルケイノス・ベイジ』が自分のカード効果によって墓地に捨てられた時、自分の墓地に存在する炎

属性モンスター一体を選択することで、このモンスターのレベルをそのモンスターの数だけ上げて、フィールド上に特殊召喚することが出来る。俺は墓地のレベル3『ヴォルケイオス・サーペント』を選択し、『ヴォルケイノス・ベイジ』を特殊召喚」

トウヤは手札の『ヴォルケイノス・ベイジ』をセットした。すると、トウヤのフィールド上に溶岩が落ちてきたと思ったならその溶岩が人型に形成された。

ウウ・・・

ATK300 DEF0 LV・1 4 ベース

「そして手札から『フレイム・コア』を通常召喚」

トウヤのフィールド上に炎を内側に宿した球体が召喚された。

ATK400 DEF0 LV・4

「また出てきやがった。どんだけモンスターを召喚するんだよ」と言うより、これもまたやばいパターンだ。なぜなら、そのうちの一体はベースモンスターだからだ。

「俺はレベル4の『ヴォルケイノス・ベイジ』に、レベル4の『フレイム・コア』をジェネレート！」

『ヴォルケイノス・タクト』と同じような演出がされた。

「炎の天馬よ、豪炎の双翼をはためかせ、天へと昇れ！エボリューション召喚！」

炎柱がたち、その中から二枚の翼が見えたと思ったら、その翼がはためき、炎柱が弾け飛んだ。その中から頭に一角をはやしたペガサスが現れた。

「昇天せよ、『ヴォルケイノス・ペガサス』！」

ATK2600 DEF1200 LV・6

「マジかよ・・・。エボリューションモンスターをたった1ターンで2体も」

まずい、いきなりの万事休すだ。どう対応する？遊矢は生唾を飲み込んだ。

「『ヴォルケイノス・ペガサス』の効果発動。エフェクトコアを一つ使うことで、俺のライフを100ポイントダウンさせ、このカード以外の自分フィールド上に存在するモンスター1体を選択、そのモンスターの攻撃力分だけこのモンスターの攻撃力をエンドフェイズ時までアップさる。さらに、その選択したモンスターが、『ヴォルケイノス』と名の付いたモンスターの場合、デッキから一枚ドロウすることが出来る」

【トウヤ】LP4000 3000

「やべ・・・」

マジでまずい。トウヤのフィールド上に存在するモンスターは『ヴォルケイオス・ペガサス』と、『ヴォルケイオス・タクト』のみつまり、『ヴォルケイオス・ペガサス』の効果によって選択されるのは・・・。

「『ヴォルケイノス・ペガサス』の効果により、俺のフィールド上に存在する『ヴォルケイノス・タクト』を選択」

「くッ！」

『ヴォルケイノス・ペガサス』と『ヴォルケイノス・タクト』が炎の渦により繋がった。まるで、お互いがリンクしているようだった。

『ヴォルケイノス・タクト』はただ口元で笑みを浮かべるだけだった。

ヒヒイイイイッ！！

『ヴォルケイノス・ペガサス』は前足を高く上げて、大きな音を立てて翼をはためかせた。

ATK2600 4300

「うわあああ！このままじゃあ1ターンキルです！」

遊矢の後ろでキョウジユが叫んで頭を抱えていた。いきなり1ターンキルなんてされてしまったら洒落にならない。

「やれ、『ヴォルケイノス・タクト』。『ウィンディア・シムルグ』に攻撃」

フンッ

『ヴォルケイノス・タクト』が指揮棒を振るった。すると、音階を指揮するかのように、トウヤのフィールドを包み込んだ。もし、ここで『ヴォルケイノス・タクト』の攻撃が通れば1ターンキル確実だ。

「フレイム・シンフォニオ！」

フン・・・

『ヴォルケイノス・タクト』が指揮棒を振ると、その先から炎の塊が隕石みたいに『ウィンディア・シムルグ』向かって飛んできた。

「終わりだ・・・」

トウヤが目をつぶって呟いた。その声はしっかりと遊矢の耳にも聞き取れた。

「終わらねえよ！墓地の『ウィンディア・ツインズ』の効果発動！」

「！？」

さすがのトウヤも予想外だったらしい。パツと目を開かせてジツと遊矢を見つめた。

「このモンスターが、『ウィンディア』と名の付いたモンスターのアドバンス召喚のためにリリースされ、墓地に送られ、俺のフィールド上に存在する風属性モンスターが戦闘を行う時、このモンスターが墓地に存在するときに発動できる！このモンスターを墓地から除外することで、その戦闘を無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

遊矢のその言葉と共に墓地から『ウィンディア・ツインズ』が現れ、風のバリアを張り、『ウィンディア・シムルグ』を炎の隕石から守った。

「チツ・・・仕留めそこなったか。カードを一枚伏せて、ターンエンド」

トウヤは舌打ちを一つ打った。

『ヴォルケイノス・ペガサス』

ATK4300 2600

『ウインディア・シムルグ』

ATK1200 2400

【遊矢】

「おつし、行つくぜえ！俺のターン・・・」

遊矢がデッキの上のカードに触れた。

「ドロー！」

遊矢はカードをドローして、しばらく眺めた。

（あいつらの攻撃を凌げるのは後1回きり。それもトウヤが次のドローでどう転ぶか分からない）

遊矢はトウヤのフィールド上に存在するカード全てを見渡した。

トウヤのフィールド上にはエボリューションモンスターが2体と伏せカードが一枚。今やっておくべきなのは、トウヤのフィールド上に存在する『ヴォルケイノス・タクト』を倒すこと。このターンで倒してしまうのがベストだが、どうやれば・・・。今の状況では遊矢のエボリューションモンスターを出すことは出来ない。だったら、力づくで倒すしかない。

「手札から魔法カード、『エアバーン』を発動！」

トウヤはただただ遊矢を見つめていた。

「このカードは、俺のフィールド上に存在する風属性モンスター

の攻撃力をこのターンのエンドフェイズまで500ポイントアップさせ、そのモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した場合、もう一度だけ、戦闘行うことが出来る！」

「……………」

遊矢のフィールド上に存在する風属性モンスターは攻撃力2400の『ウインディア・シムルグ』のみ。だから……。

「俺のフィールド上に存在する。風属性モンスターは『ウインディア・シムルグ』のみ！よって、『ウインディア・シムルグ』の攻撃力を500ポイントアップさせる！」

「……………」

今、トウヤが顔をほんの少ししかめた。これは少々予想外だったのか。しかし、遊矢の反撃は終わらない。

「さらに、『ウインディア・シムルグ』の効果発動！俺が魔法カードを発動したときに発動できる！俺の墓地に存在する風属性モンスター1体を除外することで、相手フィールド上に存在する魔法・罠（トラップ）カード1枚を破壊する！俺は、墓地に存在する『カゼボア』を除外！」

「何！？」

ここまで来ると本当にやばいらしい。だが、ここは追い詰めていく。

「行け！『ウインディア・シムルグ』！ウインドサイクロン！」

キヤアア！

ATK2400 2900

『ウインディア・シムルグ』が大きく雄叫びを上げて両翼を強く羽ばたかせた。翼を振るたびに両翼に風が集まっていく。そして、風が強く吹き、トウヤのスクーフを激しくなびかせた。風が強すぎてトウヤは目を腕で覆い隠していた。しばらくすると、その風は止み、トウヤは目を開けた。そして、第1発目で飛び込んだ光景は、

自分のフィールド上にセットされたリバーズカードがなくなっていたこと。第2発目は遊矢の不敵な笑みだった。

「行くぜえ、トウヤ！行け、『ウインディア・シムルグ』！『ヴォルケイノス・タクト』に攻撃！」

キキヤアアア！

「ストームシューター！」

『ウインディア・シムルグ』の体全体が風に包まれ、緑色のオーラが包み込んだ。すると、そのオーラを纏った『ウインディア・シムルグ』が『ヴォルケイノス・タクト』の方へ飛び向かっていた。

キイイイイ！

そして、何も防ぐことが出来ず、『ヴォルケイノス・タクト』にぶつかった。

グッ！

『ヴォルケイノス・タクト』の体がくの字に折れ曲がったと思ったら。黄色い粒子になって上空へ飛び交い、消滅した。そして、その余波がトウヤに当たる。

「ぐ！？」

【トウヤ】 L P 3 0 0 0 1 8 0 0

「まだまだ！行け、もう1発！『ヴォルケイノス・ペガサス』に攻撃！」

キキヤアア！

緑色の波動を纏った『ウインディア・シムルグ』がそのまま反転し、今度は『ヴォルケイノス・ペガサス』に向かって突進していた。

「行っけええ！ストーム・・・シューター！」

キヤアア！

『ウインディア・シムルグ』の攻撃が『ヴォルケイノス・ペガサス』の体に直撃した。直撃の瞬間、大きな風が2対のモンスターを

取り囲む。その中で、明らかに苦しそうにしているのは『ヴォルケイノス・ペガサス』だった。

ヒイイイ！

『ヴォルケイノス・ペガサス』もまた大きな鳴き声を挙げながら黄色い粒子になって上空に飛び交い、消滅していった。

トウヤはその攻撃の余波を防ぐがごとく腕で顔を覆い隠した。

「ぐっ！」

【トウヤ】 LP1800 1500

その余波がなくなるとトウヤは腕を下げ、遊矢を強く見つめてきた。遊矢はその目に対して、不敵な笑みで応えた。すると、トウヤの口元が、かすかに笑った。明らかに楽しんでいる。この危機的状況を楽しんでいいる。遊矢にはそれが直感できた。

(面白い……。こんな所にいたとはな)

トウヤが口を開いた。

「風宮遊矢……」

「ん？」

「どうやら、貴様らしいな。この俺とまともに対等に戦えるのは」と、トウヤはぐっと拳を遊矢に向けた。

「風宮、これからは貴様を俺のライバルとして認めてやる」

その瞬間だった、遊矢とトウヤを取り囲むギャラリーが騒然とした。びつくりするのは当たり前だ。あの世界屈指のレベルを持つ上瀬トウヤが、学校の生徒のただ一人である風宮遊矢をライバルとして認めたのだから。

トウヤは拳を引き寄せ、自分の顔に近づけた。

「だから、貴様をここで全力で叩き潰す！」

遊矢は顔をしかめ腕を動かした。

「俺はカードを一枚伏せて、ターンエンド」

【トウヤ】

「俺のターン・・・ドロー！」

トウヤはドロークカードに目を見やった。そして、明らかに勝利を確信している様な表情だ。遊矢はその表情を読み取ると生唾を飲み込んだ。

「俺は手札から魔法カード、『ヴォルケーノドロ』を発動！このカードは、俺の墓地に『ヴォルケイノス』と名の付いたモンスターが4種類以上存在するときに発動することが出来る。俺のデッキからカードを2枚ドロースる。ただし、俺のフィールド上に存在するカードが1枚も存在しないときは、俺の墓地に存在する『ヴォルケイノス』と名の付いたモンスターの種類だけドロースることが出来る」

「ッ！」

トウヤの墓地に存在する『ヴォルケイノス』と名の付いたモンスターの種類は4種類ジャスト。しかも、トウヤのフィールド上にはカードが一枚も存在しない。つまり、トウヤの手札は一気に5枚になっってしまう。それだけ大きなドロース出来れば、裕也のフィールドを崩すチャンスは十分にある。

「俺は手札から4枚ドロースる！」

トウヤが引いた4枚のカードが力強い音を立てて、彼の手の中に納まった。

「俺は手札から、『ツイン・ヴェルケイノス』を発動！このカードは、俺のフィールド上に、モンスターが1体も存在しないとき、デッキから『ヴォルケイノス』と名の付いたレベル4以下のモンスターを2体、特殊召喚することが出来る」

「へ？」

何をする気なんだ？遊矢はリバースカードを発動させる準備をした。しかし、そんな様子など、気にしていない様子だった。むしろ、そんな事などしても無駄だと言う表情だった。

「俺はデッキから『ヴォルケイノス・チーター』、『ヴォルケイノス・ホークス』を特殊召喚！」

トウヤがデッキから引き出したカード2枚を掴み、デュエルディスクにセットした。

DFビジョンによって、トウヤのフィールド上に溶岩の体をしたフクロウと、炎を尻尾から巻き上げている斑模様のチーターが現れた。

『ヴォルケイノス・チーター』

ATK1000 DEF100 LV・4 ベース

『ヴォルケイノス・ホークス』

ATK500 DEF1200 LV・4

「まさか、エボリリューション召喚か？」

「フン。この瞬間、『ヴォルケイノス・チーター』の効果発動！このカードが、『ヴォルケイノス』と名のついた魔法カードの効果によって特殊召喚された時、相手フィールド上に存在する魔法・罫カードを1枚破壊する！」

「何!？」

その瞬間、『ヴォルケイノス・チーター』がいきなり、遊矢のフィールドの現れ、遊矢のリバースカード1枚を破壊した。

その破壊された後の粒子から、顔を守るように、遊矢は腕で顔を覆い隠した。

「グッ！」

「さらに、『ヴォルケイノス・ホークス』の効果発動！このカードは、俺のフィールド上に存在する『ヴォルケイノス』と名のついたモンスターの効果が発動され、その発動に成功した時、相手フィールド上に存在するセットされたカードをすべて確認し、そのうち2枚のカードを、相手の手札に戻す」

「ッ！」

そうなればヤバイ。遊矢のフィールド上に存在する遊矢のフィールド上にセットされたカードは全て無くなる。そうなれば相手の好き放題だ。

『ヴォルケイノス・ホークス』が遊矢のフィールドを高速で横切った。その瞬間、セットされたリバーズカードが露になり、トウヤに見せてしまった。

セットされたカードは、相手モンスターの戦闘を無効にし、そのモンスターの攻撃力を3ターンの間半分にする、『エアロイドシールド』と、相手フィールド上に存在する表側攻撃表示モンスター全てを破壊する、『聖なるバリア・ミラーフォース』だった。これは痛い。これじゃあ、遊矢のフィールドは丸裸だ。しかも、相手フィールド上にはベースモンスターと、同じレベルのモンスターがいる。ここでエボリューション召喚でもされたら、トウヤの墓地にはエフェクトコアが6枚になってしまう。

「俺はレベル4のベースモンスター、『ヴォルケイノス・チーター』に、レベル4の、『ヴォルケイノス・ホークス』をジエネレーター！」

2体のモンスターが炎柱に囲まれた。さっきとは演出が違う。

「全てを灰にする紅蓮の焰よ、今その力を翼に変え、我が下に光臨せよ！エボリューション召喚！」

二つの炎柱を取り囲むように、のマークが形作られ、その中間点で、爆炎が巻き起こった。その爆風によって遊矢の体が吹き飛ばされそうになった。

「うわああああ！」

そして、そのモンスターの体が露になった。赤い体を持った、鳥遊矢が今まで見たモンスターを凌ぐほどの威圧を、そのモンスターによって感じた。

「現れる！『朱雀皇ドランザー』！！」

キオオオオ！！

ATK2700 DEF1900

遊矢は、そのモンスターを驚きの表情を浮かべながら、見上げた。

「朱雀皇・・・ドランザー・・・」

遊矢は声を震わせながら呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3427z/>

遊戯王Gレボリューション

2011年12月19日21時47分発行